

皆さま、こんにちは。

府中教会、アンドレアです。

今日の典礼は二人の息子に関する福音のたとえを示します（マタイ 21・28-32）。二人の息子は父親から父親のぶどう園で働くように命じられます。一人の息子はすぐに「承知しました」と言いましたが、その後、出かけませんでした。もう一人の息子は初め「いやです」と答えましたが、その後、考え直して、父の望みに従いました。もし、私たちも最初に「はい」といったとしても、私たちは神に従い続けているのでしょうか。単に神に仕えているという外見をつくらっているだけで、本当は自分たちのしたいようにしてはいないのでしょうか。私たちの人生のこの時に、神は私にどのように仕えて欲しいのかよく考えてみましょう。神の呼びかけに私たちはどのように応えていますか。

イエスはこのたとえ話によって、ご自分が、悔い改めた罪人を何よりも愛することを強調します。そして、救いの恵みを受けるために私たちに必要なのはへりくだりであることを教えます。聖パウロも、今日私たちが黙想するフィリピの信徒への手紙の箇所の中で、私たちがへりくだるよう勧めます。聖パウロはいいます。「何ごとも利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分より優れた者と考えなさい」（フィリピ 2・3）。これがキリストの抱いていた思いです。キリストは私たちへの愛のゆえに 神の栄光を捨て、人間となり、十字架の死に至るまで身を低くされました（フィリピ 2・5-8）。ここで用いられる「エケノセン」というギリシア語は、文字どおりキリストが「自分を無にした」ことを表します。そして、優れた意味で謙遜なしもべであるイエスの深いへりくだりと限りない愛をはっきりと示します。

